

岐阜市立女子短期大学での 29 年間を顧みて

食物栄養学科 名誉教授 清水英世

私は、1977 年から 2006 年まで岐女短にお世話になった。その間、思い出されるのは学科の特色を生かして地域住民の栄養学的調査、体格体力調査、生活環境調査等を、1 週間にわたり夏休み中に実施した。本学、岐阜薬大、椋山女学園大の教員、保健婦の方、そして本学学生(約 40 名)のメンバーで、岐阜市三輪北地区、日野地区、揖斐郡春日村地区の小学校教室で合宿しながら小学生以上の方々を対象に調査して、毎晩夜半過ぎまで分析し、各家庭別及び個人別にデータ整理を行って、調査結果を各家庭へ報告し、改善事項等を指導した。教室内での授業とは少し異なり、フィールドワークでの教育やコミュニケーションは実に中身の濃いものであった。思い起こすと、風呂まで用意して頂いた地域住民の皆様や、多額の生活費を支払ってまでも積極的に参加してくれた学生の皆様には、多大な協力を賜り感謝の念が絶えないし、そして思い出に残る調査でもあった。

また、全学科の学生約 500 名を対象に採血して血液性状を分析し、結果を学生一人一人に還元して食生活とともに貧血に対する意識を持たせ、場合によっては改善の一助になるようなアドバイスを与えた。5 年間継続する間に大きな成果をあげることができた。

一方、在職中に、国際文化学科の誕生と、学生が望んでいた生協が誕生した。新学科設置に関しては、全学で後押ししたが、私の役目は学生部に関することについて文部科学省による面接を受けることであった。生協の誕生は、本学学生には勿論、教職員にとっても非常に有難いことである。しかし、その陰で、長良キャンパス時代に、生協の誕生を夢見て粉骨砕身して活動を続けたにもかかわらず、その恩恵も受けずに卒業していった学生達のことを思いやると、あまりにもかわいそうで涙が止まらなかったのを覚えている。

また、中部地区を中心とした 11 県の公立短大が参加し、毎年夏休みに中部公立短大交歓競技会を開催していた時代があった。この大会を目指して一年間練習を重ねていた姿を見ていたので、勝っても負けても選手たちが流す涙は純粹で美しく心打たれるものがあった。

29 年間を通して、真面目で素直で純粋な学生が多く、授業や学生指導等も進めやすかったのがなにより幸せであったし、学生たちに感謝したい。

多くの卒業生から毎年届く年賀状で、彼女達の様子に接することができ、人と人の繋がりを嬉しく感ずるこの頃である。いつまでも輝く卒業生を社会へ送り出す岐女短であり続けることを祈念している。